

(四) フルート、ケーナ、尺八、そして虚無僧

坪井應龍



るから不思議だ。

フルート、ケーナ、尺八。あまり関連はなさそうな笛たちだが、どれも原理はまったく同じである。だから、基本的な演奏法、発音の仕方はみな同じである。しかし、材質も、指孔の数もその配置も、したがって調律も、その使われる地域・民族、音楽ジャンル、演奏者の社会的立場など、なにもかもまったく違う。結果として、音色も随分と違って聞こえる。純粹に音だけ分析すればそう変わるものではないが、その扱い方、扱われ方で印象はまるで異なるから不思議だ。

フルート、ケーナ、尺八。これは私にとって人生の軌跡のようなものでもある。考え方、感じ方、価値観、大袈裟に言えば人生観までも、この三つの笛に対応している。

私が初めてフルートを手にしたのは中学校の吹奏楽部だった。以来半世紀以上、フルートはいつも手元にある。ケーナは二十代の終わりに始め、一時はかなり本格的に吹いていた。そして現在は主に尺八を吹いている。三つの笛に、各々二十年くらい費やしたことになろうか。

フルート。私の音楽体験の最初にはバツハがあった。荘厳で精緻で美しい音楽。そんなものに憧れた。その精神の根源であるキリスト教にも、西洋合理主義、科学技術にも憧れた。そして理路整然とし

た音楽理論も学んだ。フルートはそんな中であつた。

そんな価値観を粉砕したのは、アンデス・ポリビアの田舎の民俗音楽(アウトクトナ)であつた。太鼓と笛だけ。クラシック音楽の理論などまったく通用しない。音階すらデタラメ(と、当時の私には聞こえた)。少なくとも笛同士の間隔すらしていない。それでもそこから感じる強さ。それはアンデスの虐げられた歴史から来るのかも知れない。とにかく、近代西洋の洗練された合理主義とは相容れないものだ。アンデス(南米)は、その西洋に五百年近くも前にキリスト教布教の大義のもとに征服され、表層的には西洋文明の蔓延る世界でもあるのだが。

アンデスの音楽と言えばフォルクローレ。つまりケーナなどのアンデス伝統の笛と太鼓、それに西洋起源のギター類、そしてスペイン語の歌詞の歌の合奏だが、それは破壊されたインカの古い神殿の基礎の上に建てられたキリスト教会のようなものだ。それでもそこにはアンデスの原住民たちの心は息づいていた。陽気な悲哀とでも言えようか。不思議なことにフォルクローレは日本人にはよく馴染む。街頭演奏すれば投げ銭がよく入ったし、ステージでの聴衆の反応には病みつきになつてしまった。おかげで随分とパフォーマンスの勝つたことをしていたものだが、それは今の虚無僧尺八とは真逆な音楽だつた。

現在尺八を、しかも虚無僧尺八を吹いていることは、まったくの偶然である。仕事の都合で尺八を「ちよつと」かじる必要が生じた。たまたま紹介された師匠(善養寺恵介師)から学ぶことになつたのが「虚無僧」の尺八であつたが、これはまったくの想定外で、この時まで、そもそも虚無僧尺八の何た

るかの認識すらなかった。ちょうどこのころ、坐禅会にも通い始めていた。心に迷い・悩みが深くなったからだ。この二つの偶然から、「ちよつと」のつもりが深入りして、二十年が過ぎた。尺八と禅が共鳴してしまったのだ。

虚無僧の尺八は、フルートやケーナのような、「音楽」であるよりは、むしろ、いわば、坐禅のようなものであった。読経でもある。修行であり、その先にあるのは「音楽」より心身の「安楽」である。大袈裟に言えば、生きていくための、あるいは死んでいくための、心の拠所である。尺八の吹奏による禅だから、これを「吹禅」といい、だから尺八は楽器ではなく「法器」と呼ばれる。

やがて、虚無僧行脚もするようになった。天蓋という深編笠を被つて、尺八を吹いて乞食行をするのである。始める前は、ケーナの街頭演奏くらいの気持ちだったが、それはとんでもない心得違いであった。これは確かに「行」であった。断じてコスプレではない。

フルート、ケーナ、尺八。奇しくも、まったく異なる複数の笛を吹いてきたのは、笛吹きとして、とても意義のあることだった。一つのことを極めるには、それに専念し、深化させていかねばならない。しかし、時にはそれを相対化して見るのも大切だし、役に立つ。

ケーナと尺八は、原理は全く同じで作りもよく似ているが、その特性は両極端とも言える。ケーナから尺八に乗り換えた当初は、発音すらままならなかった。だから長い間、ケーナは封印していた。その後、どうしてもケーナを吹く必要が生じ、いざ吹いてみたら、ケーナが思うように鳴らせない。

やつとケーナが吹ければ尺八が鳴らなくなる。試行錯誤の末、持ち替えてできるようになった時に得られていたのは、どちらか一方だけを吹いてはけつして得られなかったであろう一段上の智慧であった。

これは、尺八だけに限ってみても同じだ。自然の素材で作る尺八は一本一本が微妙に、時には全く、違う。だから、良く鳴るお気に入り的一本から他に持ち替えた途端、まるで鳴らなくなることはよくある。だから、時間と心に余裕のある時、手持ちの尺八を全部並べて順番に吹いてみる。こうして各々を相対化することで、今まで鳴らなかった多くの尺八が各々の個性を持って鳴り始め、お気に入りの一本もさらに融通が利くようになる。

曲、曲種、あるいはジャンルについても同じだ。ここ二十年ほどひたすら吹いてきたのは虚無僧の尺八(古典本曲)であった。数年前に琴古流本曲、つい最近は都山流本曲に挑戦してみた。ちよつと聞くと同じように聞こえる技巧が、実はまるで反対のことをしていることがある。陰と陽のようなものだ。身体が思うように反応せず、最初はまさに混乱した。しかし、なんとかどちらにも対応できるようになったら、陰を深めることで陽が際立つつとも言うように、世界が開けたような気がする。

フルート、ケーナ、尺八。楽器も音楽も、ずいぶんな遍歴であったと思う。これは、西洋合理主義・キリスト教的なるものから東洋的・日本的なるもの・仏教的なるものへの回帰でもあった——途中、南米アンデスを経由し、東南アジア・琉球・沖縄、自然崇拜・アニミズムにも立ち寄った。

キリスト教・西洋文明には快樂追及の臭いを感じるが、仏教は禁欲的だ。仏教の最終目標の解脱とは、己の欲からの解放だからである。虚無僧も、欲から離れることはその修行の目標ではある。しかし、これが笛吹きとしてはなかなかできない。もつと大きい音を、もつと響く音を、もつと低い音・もつと高い音を、もつと速く華麗な指遣いを、もつともつと……、もつと客を、もつと拍手を、もつとギヤラを……、欲望は絶えない。挙句の果てに、フルートの頭部管を尺八型に代えて縦吹きして「ベーム式多孔尺八である」などと言い出す始末。しかし仏教は、欲に囚われるのでなければ、必ずしも欲を否定するものではないようだ。欲は欲として自然に任せて放つておくとして、そんな技巧や功名より大切なことがある。心である。菩提心と言ってもよい。

クラシック音楽を尺八で演奏することがある。アンデス音楽にも尺八で参加している。そんな時に、強く肝に銘じていることがある。尺八はあくまでも尺八であり、「フルートのものまね」や「ケーナのものまね」であつてはならないということだ。どんな音楽、どんな曲にせよ、それをよく解釈し咀嚼し、尺八で演奏する以上は尺八として再構成し、尺八だからこそその演奏でなければ価値はない。そこで一番大切なことは、その演奏、その音楽に、どんな念いを込めるのか、どんな祈りを込めるのか、ということだ。

そこに込める念い、そこに込める祈り、それは自分勝手な都合や計らいであつてはならない。曲そのものの中からも湧き上がってくるものでなくてはならない。おそらく百回ほど楽譜にかじりついて練習すればその気配くらいは臆げに感じられるだろう。次の百回は、自分なりにいろいろな工夫

を加えながら曲と対話する。次の百回、そろそろ楽譜は要らなくなるだろう。それからさらに何百回、いつのまにか無心で吹いているだろう。無心とは心を無くすことではない。プロペラが高速回転するとまるで無くなってしまうように見えるのと同じで、実は心が一心不乱にフル回転していることなのだ。演奏するというのはそういうことなのだ。それは、虚無僧の尺八に限ったことではない。琴古流や都山流の本曲でも、クラシックでもアンデス音楽でも、どんな音楽でも、本当はみなそういうことなのだ。これは、五線譜にかじりついてフルートを「間違わずに」吹くこと、レコードを耳コピしてケーンを「本物らしく」吹くこと、を目標にしていた時代には、とんと思い付きもしないことであった。尺八は、やはり「法器」と呼ぶのが、最も相応しいのかもしれない。法器尺八、虚無僧の尺八は、私に、真の音楽を教えてくれた。

(じぼい おんりやん)

045-824-5278 ooryo.t@gmail.com